

## Y06c 日本書紀推古36年の皆既日食の信憑性

谷川清隆 (国立天文台)、相馬 充 (国立天文台)

日本書紀推古天皇三十六年の項に「三月丁未朔戊申、日有蝕盡之」なる記述がある。日本書紀の(公式の)日食記事として最初のものである。長い伝統を持つ中国史書の規則どおりに読むと、これは皆既日食である。計算によると(渡邊敏夫, 日食月食宝典), 確かにこの日皆既日食はあった。西暦(ユリウス暦)628年4月10日の日食である。問題は皆既帯が日本列島上を通ったかどうかである。

通説では、推古三十六年の皆既日食記事は誇張表現であるとされている(渡邊敏夫「日食月食宝典」, 内田正男「日本暦日原典」, 齋藤国治「星の古記録」)。代表して内田正男氏の見解を掲げておこう。「この日食は飛鳥地方で、午前9時半前に食甚となり、食分は9割を越えたが皆既とはならなかった。しかし皆既とはならなくとも、9割以上もかければ気温は下り、一種異様な雰囲気となる。別に暦に予報されなくとも誰でも気付く現象である。書紀の記録を実見の記録とすれば、...」(内田正男, 日本暦日原典, 1975年, 525ページ。)この通説には根拠がある。西暦600年あたりの $\Delta T = 4000$ 秒とすると、推古三十六年日食の皆既帯は、日本列島上ではなく、太平洋上にある。もうひとつは、古代日食の信憑性である。中国の史書の天文記事の中には信用ならないものもある。とくに皆既食の場合はそうである。これが通説の強い支えになっているものと思われる。

Stephensonの本(1997)のグラフ(p. 508)で600年前後の日月食の結果を見ると、585年から596年の中国における月食の結果からは $TD - UT = 5000$  sec前後の大きな値が得られているのに対して、680年ころの中国の日食の結果からは $TD - UT = 2000$  sec前後の値が得られていて、滑らかな曲線は日食の結果からはずれ、月食の結果に合うように引かれていることがわかる。628年の日本の日食の記録はこれらの日食の記録とほぼ一致しており、その結果滑らかな曲線からはずれているのである。そこで日食と月食の結果がどうして食い違っているのかが問題になる。今回の報告では、月の黄経の潮汐項がこれらの決定に及ぼす効果について考察する。